

る。前田夕暮の有名な連作「わが死顔」を思い出す。

「わが死顔」を最初に評価したのは中井英夫である。中井の『黒衣の短歌史』に、編集者として、不気味に美しい一連「わが死顔」をはじめと読んで、おつと思ひ、「短歌への信頼を一気に回復した」と書いている。

岩木嶺の麓のりんご紅深み裾野の霧をそめぼかしたり
長住百合子

「そめぼかす」は「染め・暈かす」二語だが、ここでは複合動詞のように読める。霧をぼんやり紅くそめているのである。岩木山の手前に林檎園が広がっていて、うつすら霧がかかっている。今は遠景の岩木山は霧に隠されているだろう。ひろびろとした空気を読めて、なかなかの一首。林檎園の林檎はたいてい袋がかかっているようだ、ここは無袋林檎。

朝五時の芦ノ湖昏し対岸に昨夜のす糸なるともしび
田中薫

「晩秋」が一連中にある。朝五時ではまだ真つ暗だろう。「す糸」は行末・末尾の意味。「きぞ」「す糸」「ともしび」という語のひびきによるのだろう、古風な感じにして、それが持ち味になっている。

君と僕細君旦那さまなどとむかし品良き漫才ありき
河野洋子

今は品の悪い漫才ばかり、そう言っている。夢路いとし・喜味こいし、コロンビアトップ・ライトといった人たちは、そう言えば、「君」「僕」と言っていたような気がする。演芸の評価の基準にも品格があった、そんな時代があったことを思い出した。

忠魂の碑も寒からん傍らに発光ダイオード灯る塔立ち
松田英美

「発光ダイオード」が象徴する経済優先、便利優先の今風な灯りのニユアンスのなき。昭和前期の死者たちは寒がっているだろう、とは説得力ある見方だ。「発光ダイオード」と「忠魂碑」を一首に詠み込んだ取材感覚はすばらしい。

帯解いて顔を洗つて人間に戻れど「こん」としはぶく寒さ
花美月

王子稲荷の振袖白狐の行列に参加し、終わった後の場面。ユーモラスな味わいがうれしい。洗う前の顔は、狐ふうのメイキャップがされていたのだ。ただ、「こん」は、やや強くひびき過ぎか。

大木のある森でしか生きられぬ鼯鼠といふ不器用は
美し
松岡秀明

「鼯鼠」はムササビ、「美し」は「はし」と読む。ムササビは独特の飛び方で、器用なのかと思っていたから、一説外な感じがした。

この歌では、環境に適應する適応力が低い点を不器用と言っているわけだが、鳥のように長距離は飛べないし、地上を歩くこともできないムササビは、文字通り不器用な生物なのだろう。下句「鼯鼠といふ不器用は美し」は、びたつと着地が決まった感じ。

白雲の浮きいる空を背景にひかりふたたびひるがえす
宇都宮とよ

伝書鳩だろうか。あるいは観光地などでたくさんのがいっせいに飛んだ場面だろう。いずれにしても、この「鳩」は単数ではなく複数と読む。飛ぶ鳩の群れがいっせいに方向転換するときの独特な動きを的確に表現した一首。「ふたたび」が、うまい。